

ウーヴェ・ヨーンゾン『記念の日々』における新聞メディアと故郷 —ニューヨーク・タイムズを例に—

西尾 悠子

要旨

Über die Rolle und Funktion der US-amerikanischen Tageszeitung *The New York Times* im Uwe Johnsons (1934-1984) Hauptwerk *Jahrestage. Aus dem Leben von Gesine Cresspahl* (1970-1983) wurde in der bisherigen Forschung bereits mehrfach diskutiert. Ihre Erfahrungen mit den politischen Systemen in Deutschland, mit dem NS-Regime, der sowjetischen Besatzungspolitik, mit der frühen DDR- und der BRD-Regierung, haben die Protagonistin Gesine Cresspahl zu einer leidenschaftlichen Zeitungsleserin „erzogen“¹; in New York ist sie auf die besagte *New York Times* gestoßen, auf der sie ihr ganzes Vertrauen schenkt, „als sei nur mit ihr der Tag zu beweisen“ (JT, 15). Für sie, „eine Fremde, die sich Heimat hatte erschmeicheln wollen durch Nachlesen“ (JT, 1882), ist Zeitung ein Medium, das sie und ihre neue Heimat in Verbindung bringen soll. Ziel der vorliegenden Arbeit ist es, die Rolle und Funktion der Zeitungsmedien in den *Jahrestagen* im Hinblick auf das Thema Heimat zu untersuchen; dabei werde ich insbesondere auf die *New York Times* eingehen.

キーワード: ウーヴェ・ヨーンゾン, ニューヨーク・タイムズ, 新聞, 故郷, 記憶

1. はじめに

ドイツ語圏において、元来〈出身地〉という意味で用いられていた〈故郷〉(Heimat)の概念は、19世紀以降に幾多の変遷を経た。ドイツ・ロマン主義との関連で思慕や想起の対象として見なされ、やがて〈祖国〉(Vaterland)の意味で用いられることにより政治色を強めた〈故郷〉は、ナチス・ドイツの掲げる血と土のイデオロギーに利用され、戦後のドイツ語圏においてタブー視されるようになる。1970年代に「アイデンティティを保障する生活空間」²の観点から新たに捉えられるようになった〈故郷〉をめぐる問題は、東西ドイツ再統一を機に再燃し、今日に至るまで変革を続けている。21世紀を迎え、世界がボーダーレス化した昨今、土地と密接に結びついた〈故郷〉という概念は根本から揺るがされ、「故郷とはなにか」「なにが故郷となり得るのか」といった問いが浮かび上がる。多様な故郷の像を提示するウーヴェ・ヨーンゾン (1934-1984) の長編小説『記念

の日々 — ゲジーネ・クレスパールの生活より』*Jahrestage. Aus dem Leben von Gesine Cresspahl* (1970-1983) も今、〈故郷〉のあり方を問う作品として再考する必要がある。

『記念の日々』は、主人公ゲジーネ・クレスパールがニューヨークで過ごす 1967 年 8 月 21 日から 1968 年 8 月 20 日までの 1 年間を描いた作品である。渡米して以来、6 年以上にわたって米紙「ニューヨーク・タイムズ」*The New York Times* (以下、NY タイムズ) を愛読し続けているゲジーネだが、その習慣は作中でも大きな役割を演じており、366 日に分けられた章³の大部分で、当日の報道記事の引用やまとめ、紙面に掲載されている写真の説明などが挿入されている。ゲジーネの日々の生活から切っても切れない NY タイムズは、彼女が 10 歳の娘のマリーに語るクレスパール家の家族史にも影響を与えている。その日に読んだ特定の記事——ニューヨーク内外の時事ニュースや記念日への言及などを契機に、ゲジーネの昔語りを展開されることも少なくない。ゲジーネにとって、NY タイムズは現在 (ニューヨーク) と過去 (生まれ故郷・イェーリヒョー／ドイツ北東部のメクレンブルク地方) をつなぐ媒体であるといえる。

1953 年 6 月 17 日の東ベルリン暴動を機に西ドイツへの移住を決意したゲジーネは、当時在籍していたハレ大学を中退し、フランクフルト近郊の通訳学校に入学した。卒業後、NATO に通訳として雇用された彼女は、デュッセルドルフに住居を構える。彼女が新しい環境になじむために手にしたのは、デュッセルドルフの地元紙だった。

財産を没収された子 [ゲジーネ] は、男性を探し求めていなかった。彼女は、夜はグリーン通りの中央プールか、グラッベ広場にある、次から次へと 1 年分の新聞を予約する利用者に職員が気を配ってくれる州立図書館のどちらかで過ごした。1929 年から、過ぎ去った時間を読んでいった。読んで、読んで。まるで悪性の病気から立ち直ったあとのように。デュッセルドルフを、終着駅として捉えていた […。]。ヤン・ヴェレムやインマーマンについてけなげに読み返し、『新しい住まいへようこそ』というガイドブックを集めはじめた。世紀転換期のデュッセルドルフ。(JT, 1865)

東ドイツの体制に失望し、西ドイツへと旅立ったゲジーネは、生まれ育ったイェーリヒョーの街とメクレンブルクを同時に失った。成人後にゲジーネが相続するはずだった生家は、ナチ軍人としての過去をめぐって彼女と対立していた伯父が一方的に所有権を主張している。帰る場所などどうになかった。腰を据えたデュッセルドルフを旅の「終着駅」であると信じ、ひたすら過去の新聞を読み続けた。読むことによって、逃した時間を取り戻すために。その土地の歴史や習慣を学ぶことによって、新たな故郷を手に入れるために。こうしたゲジーネの行為は、デュッセルドルフからニューヨークに転居した際にも見られる。日々 NY タイムズを読み、バックナンバーにも目を通し、ニューヨ

ーク内外の情勢と歴史に精通することによって、ニューヨークを故郷として獲得しようという試みである。「読むことによって、なんと少しでも故郷を手に入れようとしていた異邦人」(JT, 1882)——「失われた故郷と願わしい故郷の探求」⁴を続けるゲジーネにとって、新聞は日常生活の一部であると同時に、新たな故郷を獲得するためのツールとしての役割を担っているのである。しかし渡米して6年が経過した今でも、人種差別がはびこり、ベトナム戦争を正当化するアメリカ社会を容認できないゲジーネは、国の背負う罪から逃れるために自らを「客人」(JT, 90, 582, 639, 810, 1878)と称し、距離を取っている。「もちろん、マンハッタンのアッパー・ウエストサイドにあるわたしたちの故郷、それは思い込みに過ぎないのよ」(JT, 173)——そう思いながらも、ゲジーネはNYタイムズを購読し続ける。いつか新たな故郷を得ることができると信じて。

『記念の日々』におけるNYタイムズの機能と役割については、さまざまな観点から議論が重ねられてきたが、〈故郷〉(Heimat)という視点から同紙および新聞メディアに焦点を当てた研究の数は限られている。ゲジーネがNYタイムズを批判的に吟味することは少なく、「高尚な娯楽」⁵の域を出ないこと、更にヨーンゾンによる新聞記事の選択が偏っており、バイアスのかかったアメリカ像を提示していることを指摘した S. Lennox (1976, 1989)の主張は、本作品における新聞メディアの機能を捉えるには不十分である。Lennoxの成果を大きく発展させたのが、NYタイムズを含む新聞メディア、写真、ラジオやテレビなどのジャーナリズムと作品の相関関係に着目した A. Kaiser (1995)である。NYタイムズが作中で果たす役割について綿密な分析を行っている Kaiser は、新聞メディアの記憶媒体としての機能には言及しているものの、故郷の関係について踏み込んだ考察は見られない。分析対象をNYタイムズに特化し、Kaiserの研究の補完を試みた I. Plocher (2004)は、故郷を形成するには自らの感覚を通じた直接体験が不可欠であるとする S. Fischer-Kania (1996)の主張に則り、ニューヨークの街を散策する代わりに新聞を読んで済ませようとするゲジーネの姿勢こそが、彼女の故郷獲得を阻害していると述べている。『記念の日々』における故郷の概念をテーマとして挙げ、故郷という視点からゲジーネとNYタイムズの関係に着目している P. M. Schmitz (2004)も、Fischer-KaniaやPlocherと同様、同紙がゲジーネの疎外をもたらしていると結論づけている。新聞メディアは新たな故郷を手に入れるためのきっかけとなるどころか、故郷を遠ざける要因にさえなり得るといっているのである。

新聞を読むことを通じてゲジーネは記憶を手繰り寄せ、過ぎ去った日々を思い返す。10数年ぶりにイェーリヒョーを訪れた友人・アニータの話によれば、街はすっかり変わり果ててしまったのだという。ゲジーネを知っている人も、今や誰ひとりとして残ってはいない。故郷としてのメクレンブルクは永遠に失われてしまった。ゲジーネの紡ぐ〈物語〉(Geschichte)——新聞を契機として再構築される故郷の像は、彼女の失われた故郷とは異なる、新たな故郷になり得ないのだろうか。本稿では、まずゲジーネとNYタイ

ムズの関係を明らかにした上で、『記念の日々』における同紙と故郷、ひいては新聞メディアと故郷について論ずる。

2. ゲジーネとニューヨーク・タイムズ

父が新聞を読むことを日課としていたためか、ゲジーネも子どものころから新聞に慣れ親しんでいた。2歳のころから、ナチス・ドイツによる情報統制が行われていたリュウベックの日刊紙「リュウベッカー・ゲネラルアンツァイガー」*Lübecker Generalanzeiger*を派手に破っては大人たちを楽しませていたという彼女は、自身が身を置く政治体制が変わるに伴い、様々な新聞に触れる機会を得ていた。マリーに向けた独白の中で、ゲジーネは自身の新聞購読歴を次のように振り返る。

リュウベッカー・ゲネラルアンツァイガーから、フェルキッシャー・ベオバハター、ソビエト連邦のテークリッヒェ・ルントシャウとユング・ヴェルトとノイエス・ドイチュラント、フランクフルター・アルゲマイネとライニッシェ・ポストを経て、1日1時間、年を取ったおばさんと会話するようになった、そう強制的に育てられたのだとわたしに指摘するのは、あなたたちに任せることにするわ。(JT, 518)

クレスパール家で定期購読をしていたリュウベッカー・ゲネラルアンツァイガーを皮切りに、ナチス党の機関紙「フェルキッシャー・ベオバハター」*Völkischer Beobachter*、ソビエト赤軍の機関紙「テークリッヒェ・ルントシャウ」*Tägliche Rundschau*、自由ドイツ青年団の機関紙「ユング・ヴェルト」*Junge Welt*、社会主義統一党の機関紙「ノイエス・ドイチュラント」*Neues Deutschland*、フランクフルトに本社を持つ西ドイツの全国紙「フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトウング」*Frankfurter Allgemeine Zeitung*とデュッセルドルフの地方新聞「ライニッシェ・ポスト」*Rheinische Post*と、ドイツ国内で計4つの政治システムを渡り歩いたゲジーネの傍らには、常に新聞があった。父と同様に新聞を読む習慣を身に着けたゲジーネが新天地・ニューヨークで数ある新聞の中から選び取ったのは、彼女が「おばさん」と呼ぶNYタイムズである。

戦後のドイツで読んだ新聞を振り返り、赤軍の新聞を「番犬」(JT, 73)、西ドイツの新聞を「もう若くはない少女の民主的な美德」(Ebd.)と皮肉を込めてなぞらえるゲジーネは、「到底軽んじることができない」「誠実な高齢のおばさん」(JT, 74)と呼ぶNYタイムズに対して敬意を払い、一途な信頼を寄せている。同紙はゲジーネの日常生活の重要な部分を占めており、なんらかの理由で新聞を買い損ねてしまった日はごみ箱の中を探すことすら厭わないほど、「まるでそれをもってしかこの日1日を証明できないかのよう」(JT, 15)、彼女は同紙に執着する。ゲジーネにとって、NYタイムズはこれまで通り

過ぎてきたどの新聞とも異なる別格の存在なのである。

2.1 “All the News That’s Fit to Print” ——ニューヨーク・タイムズ

1851年に発刊された当初、NYタイムズは政治状況に応じて支持政党を変える新聞であった。1896年にA. S. オックスが新たな経営者となると、同紙は“All the News That’s Fit to Print”（印刷に値するすべてのニュースを）というスローガンのもと、「ニュースを偏ることなく、公明正大に、政党や宗派、および利害などに関係なく発信する」⁶ことを掲げ、リベラルな論調を前面に出すようになる。オックスの死後は娘婿のA. H. サルツバーガーが経営を引き継ぎ、オックス・サルツバーガー一族による経営は今日まで続いている。『記念の日々』の舞台となる1967年から1968年にかけて、NYタイムズはジョンソン政権によるベトナム戦争への軍事介入に注目していた。同紙によるベトナム戦争の戦況およびアメリカ内外の反応についての報道は、原則として中立を保っているものの、アメリカの軍事介入そのものを批判する姿勢は取らず、戦況を淡々と伝えるに留めている。露骨にはないにしてもジョンソン政権を擁護する動きも見せており、米歌手アーサ・キットがジョンソン大統領夫人に対して反戦発言を向けた折には、「粗野なけんか」を仕かけたとして痛烈に批判している（JT, 622 f.）⁷。リベラルを謳ってはいるものの、NYタイムズは完全に不偏不党ではなく、必要であれば愛国的な言説を展開するメディアであるといえる⁸。

ゲジーネが毎日欠かさずNYタイムズを購読する最大の理由は、仕事で不在の間に逃したニューヨークの日常ニュースを後から読み返すためである。朝、職場である銀行に向かう途中の売店で朝刊を買うと、まず満員の地下鉄の中で最新のニュースに目を通すのが彼女の日課だ。『記念の日々』の中に組み込まれているNYタイムズの記事は、どれも実際の紙面に基づいてはいるが⁹、その大半が読者であるゲジーネによる翻訳・要約であることを踏まえる必要がある。作中で取り上げられている報道——ニューヨーク市内の時事ニュース、ベトナム戦争、人種差別問題、ユダヤ人関連のニュース、東西両ドイツおよびソビエト連邦の社会情勢や、チェコスロバキアにおける改革運動「プラハの春」など——は、どれもゲジーネが目下注目している事柄である。政治・社会欄に強い関心を示す一方で、たとえば文化欄、スポーツ欄に関する言及はほとんど見られない。仕事上の必要性から経済欄は一通り読んではいらぬものの、経済ニュースそのものに個人的な関心は寄せてはいない（JT, 15）。ゲジーネにとって、ニューヨークに密着した地方紙でありながらも国際報道に力を入れているNYタイムズは、「世界における政治の方向性を示すもっとも重要な媒体」¹⁰なのである。

ナチ政権、ソ連軍による占領、東ドイツ、そして西ドイツの政治体制下で接してきたさまざまな新聞を通して、望むと望まざるとにかかわらず〈教育〉を受けてきたゲジーネにとって、完全に政治的に中立ではないものの、世界に向けて開かれたNYタイムズ

はまさに理想的な新聞であった¹¹。それでも、ゲジーネが同紙を盲目的に信用することはない。1日1時間、じっくりと時間をかけてその日のニュースを吟味する。時には批判的に、時には皮肉を交えながら、同紙と向き合う¹²。「家でも外でも、まるでひとり人間と一緒にいるよう」にNYタイムズとともにあるゲジーネは、「大きくて灰色の束を研究している最中に、そこに誰かが存在しているような、その誰かに自分が耳を傾け、答えを返す会話をを行っているような気持ち」(JT, 15)を抱く。このNYタイムズを擬人化した「誰か」——「タイムズおばさん」は、「1日の意識」(JT, 68)として、または「世界の日記帳」(JT, 1191)として、ゲジーネが見逃した、あるいは聞き逃したニューヨークとアメリカ全土のニュースのみならず、世界中のニュースを記録し、報告する。NYタイムズを通して、ゲジーネは現行のニューヨーク市長の名前とその権限や、アメリカの刑法についてだけではなく、バックナンバーを読むことによってアメリカの歴史についても学んだ(JT, 514 f.)¹³。ニューヨークという街、アメリカという国を知るために手助けをする「タイムズおばさん」は、ゲジーネにとって「ニューヨークで生きるためのいくつもの理由」を、すなわち居場所を与えた、文字通り「信頼に値する人物」(JT, 74)なのである。

2.2 「タイムズおばさん」の存在

「わたしたちはNYタイムズに慣れたのよ、まるで家庭の中にしっかりと居場所がある人物に慣れるかのように」(Ebd.)。良家の出身でモダン、ちょっと気難しいけれど寛容で誠実、世界中をめぐる見識を広め、経験を積んだ老齢の女性——高級新聞であるNYタイムズの特徴をそのまま体現したかのような「タイムズおばさん」¹⁴は、ゲジーネの信頼を勝ち得、クレスパール家の一員としての地位を確立した。「世界でもっとも老練な人物」(JT, 190)という形容からもわかるように、ゲジーネにとってNYタイムズは指針を示す規範のような存在であるといえる。「失われた権威」、すなわちメクレンブルクに残してきた父の「代わりとして招聘したわけではない」(JT, 515)。親と子からなる核家族には入らない「おばさん」は、適度な距離感を保ちながらも皆から愛される身近な親戚であり、人生の先輩でもある¹⁵。正しく、親切で、道徳が服を着て歩いているような「おばさん」は、「杓子定規な人」(JT, 75)で「お説教好き」(JT, 516)な一面をのぞかせることも多々あるものの、多忙なゲジーネが取りこぼしたニューヨークの日常を届ける「折り紙つきの現実の配達人」(JT, 609)として不動の地位を占める存在なのである。

ゲジーネはNYタイムズに全面的に賛同しているわけではない。ブルックリン区ブラウンズヴィルで黒人による暴動が起こった際、NYタイムズはジョン・リンゼイ市長が“community leaders”と対話を行ったと報じているが、ゲジーネは意図的に「コミュニティ」を「ゲッター」(大都市において、少数民族が居住している区域)に置き換えている(JT, 56)。事態を些末視しているとも捉えかねない言葉遣いを、このように自分の基準

に基づいてその都度〈修正〉し、報道の内容によっては「おばさん」と〈仲たがい〉をすることもしばしばだ。同紙に所属する非白人の報道記者が200人中3人、すなわち全体のわずか1.5%にしか満たないという事実や、それでも状況が1年前と比べて改善したと強調したり、他社における雇用状況や、そもそも調査の対象ではないユダヤ人の置かれた社会的状況を引き合いに出したりする姑息な釈明(JT, 609-612)¹⁶、同紙が反戦発言を行ったアーサ・キットに浴びせた激しい非難などに対して困惑や失望を隠せないゲジネだが、それでもNYタイムズを見限ることはしない。同紙を年かきの「おばさん」として擬人化して捉える以上、同紙が人間と同様に個人的な意見を持ち得ること、したがってその報道内容が偏り得ることも念頭に置いているからだ¹⁷。

わたしたちは、彼女 [NY タイムズ] を変えたくはなかった。彼女にとっては自国の繁栄と利益が世界よりも大切なのだと、この枠組みに沿って彼女の持つ偏見を導き出した。多くの場合、彼女の国のエゴイズムは、彼女の異議や非難を気にかけない […]。(JT, 74 f.)

記事の「時代がかった言い返し」や「不注意な繰り返し」も、その理屈に従えば「NY タイムズおばさん」の高齢によるものであると解釈できる(JT, 516)。

「タイムズおばさん」の投げかける言葉を受け止め、返す——空想上の相手とはいえ、NY タイムズとの〈対話〉はゲジネの日常にルーチンとして組み込まれており、不可欠となっている。ニューヨーク生活の支えともいえる「タイムズおばさん」の存在は、しかし同時にゲジネがニューヨークにおいて疎外状態(Entfremdung)に置かれていることを如実に物語っている¹⁸。ゲジネとNYタイムズの関係は、彼女がニューヨークで築いたどの人間関係よりも親密である。裏を返せば、ニューヨークでゲジネが「タイムズおばさん」以上に心を許せる人間は(娘のマリーや、同郷の恋人D. E.などのわずかな例外を除いて)いないということになる。NYタイムズとの対話はゲジネにとっていわば「代替のコミュニケーション」であり、日常生活で得られないニューヨーク市民との触れ合いを補完するという役目も負っている¹⁹。その意味においても、同紙はゲジネにとってなくてはならない存在であるといえる。

『記念の日々』には、ゲジネが想像上の会話を交わす〈死者〉たちが登場する。両親や恋人のヤーコフ、イェーリヒョーの知人など、生前、ゲジネの人生において大きな意味を持っていた〈死者〉たちの〈声〉は、彼女ひとりにしか聞こえない。常日頃からゲジネの思考や行動を諷めている〈死者〉たちは、上記の非白人記者の雇用に関する記事を読んだ直後にも、彼女のNYタイムズに対する信頼に揺さぶりをかける。「よく見なさい、ゲジネ。そこは題名通りには書かれていないよ」(JT, 612)。ここで言及されている記事のタイトルは“News Media Charged With Giving False Image of Minorities”²⁰(マ

イノリティの誤ったイメージを与えたと非難される報道機関)だが、実際に取り上げられているのは報道機関におけるマイノリティの雇用状況のみであり、報道機関がマイノリティの誤ったイメージ(マイノリティの置かれている現実と報道の乖離)を発信しているという事実そのものに対する批判は行われていない。

こんな彼女 [タイムズおばさん] は知らないわ。

口うるさくて、油断のならない年寄りのおばさんが、後ろめたく思っているんだ。そんなやつに語らせるんだろう、おまえが目を背けているとき、この世でなにが起こっているのか。そしておまえはしばしば目を向けることができないんだよ、ゲジーネ。 [...]

このおばさんを家から追い出したら。一体誰が彼女のあとに続くの？
(Ebd.)

〈死者〉たちは、NY タイムズが「折り紙つきの現実の配達人」と呼ぶには値しない存在であるという事実を突きつける。ゲジーネの懸命な擁護も次々と打破され、成すすべもない。しかし同紙を手放してしまえば、ゲジーネは心の拠りどころも同時に失うことになる。どれだけ信頼が揺らごうとも、ゲジーネはNY タイムズに頼らざるを得ない。彼女がニューヨークで生活を続ける限り、同紙を読み続ける以外の選択肢は存在しないのである。

3. 新聞メディアと故郷

ドイツに帰る場所は残されておらず、アメリカを帰る場所と見なすことができない。ドイツ人として母国ドイツと結びつけられることを厭い(JT, 145, 851)、アメリカでは「客人」であるとかたくなに主張し続けるゲジーネは——ドイツ語の〈故郷〉(Heimat)の基本的な定義が土地と密接に結びついていることを踏まえるならば——揺るぎない居場所を持たない〈故郷を喪失した状態〉(heimatlos)にあるといえる。新しい街に越してきた彼女が求める新聞は、そうした〈故郷を喪失した状態〉にありながらも場所や環境を問わずに気軽にアクセスできるもののひとつとして挙げられる²¹。新聞は各地を転々とするゲジーネにとって欠かせないメディアであり、心の支えである。

C. Hamann (2002)によれば、ゲジーネは〈語り〉(Erzählen)という行為を通して過去と現在を結びつけ、〈故郷を喪失した状態〉を緩和していることになる²²。ゲジーネが故郷を喪失し、「代替の故郷」を求めながらも、他者によって故郷を決めつけられてしまう事態に辟易するジレンマにあると指摘する Plocher は、彼女の語りは「過去への逃亡」に過ぎないと断言している²³。両者の主張をまとめれば、ゲジーネの語りは失われた故郷の代わりに用意された逃げ場でしかなく、現実逃避の域を出ないということになるが、

そのように結論づけるのはいささか早急ではないだろうか。新聞が、そしてゲジエの物語が作り上げていく故郷は単なる代替物ではなく、もうひとつ別の故郷のあり方として捉えることも可能なのではないだろうか。以下、新聞メディアがもたらし得る故郷獲得の可能性について考察する。

3.1 故郷をつなぐ媒体

6年以上読み続けているNYタイムズとの出会いを、ゲジエは次のように回顧する。

わたしたちが1961年の4月にニューヨークへやってきたとき、用意されていた新聞はニュース、ジャーナル・アメリカン、ワールド・テレグラム&サン、ポスト、ヘラルド・トリビューン、ウォール・ストリート・ジャーナル、ロング・アイランド・プレス、そしてタイムズだった。(JT, 513 f.)

数多くの候補の中からNYタイムズを選び取った理由を、ゲジエはマリーに対し「イギリス起源だったから」(JT, 514)と説明している。ここで彼女が同紙と結びつけているのは、1785年に創刊された英高級紙「タイムズ」*The Times*である。

イギリスは、ゲジエの父ハインリヒ・クレスパールが家具職人として身を立てていた国である。「異郷は彼にとって常に心地のよいものだった」(JT, 402)とあるように、メクレンブルクの出身でありながら、自らの生まれ故郷と距離を置いていたハインリヒに、ドイツに戻るつもりは毛頭なかった。ナチスの躍進に対して危機感を抱いていたことも大きい。父とは対照的に、異国の地になじめなかった母リースベートが身重のままメクレンブルクに戻ったりしなければ、ゲジエはサリー州リッチモンドで生を受けていたはずであった。リッチモンドで生まれたかかと尋ねるマリーに対して、ゲジエは「そうよ。そしてそこで育っていたなら、決してイギリスを去ることはしなかった」(JT, 183)と答えている。イギリスは最愛の父と結びつく場所であり、また自身の生まれ故郷ともなり得た場所でもある。NYタイムズを手にしたきっかけが本当に「イギリス起源だったから」かどうかは定かではないが、彼女が英タイムズ紙を連想させる新聞名に引きつけられたのは、あるいはNYタイムズと英タイムズを結びつけて捉えているのは、今は亡き父への想いと、手に入れられたかもしれない幻の故郷への憧憬——イギリスで生まれ育っていたならば「名前以外は誰か別人で、ドイツ人ではなく、ドイツ人についてはよその、遠く離れた複数形で話していた。別の国家の罪を背負っていたはずだった」(JT, 334)という叶わぬ願いがあるからだろう。イギリスへのあこがれは、生まれながらに背負ったドイツの罪から逃れたいという切望の裏返しだ。ゲジエにとって〈故郷としてのイギリス〉は、〈ドイツ以外の別の国〉という意味において理想的な故郷であり、新天地アメリカで「イギリス起源」のNYタイムズを選択したのは、そのイギリス

に想いを馳せたためと考えられる。

他方でゲジーネは、ヘラルド・トリビューン（正式名称「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン」*New York Herald Tribune*）のファッションブルな一面とNYタイムズの生真面目な一面を見比べ、後者を選んだとも述べている（JT, 74）。スキャンダル紙であるニュース（正式名称「ニューヨーク・デイリー・ニュース」*New York Daily News*）は買いたくなかったという発言（JT, 514）²⁴や、NYタイムズとヘラルド・トリビューンの2紙に絞った上で前者を選択した点を考慮すると、単純にゲジーネが大衆紙（ヘラルド・トリビューン）よりも政治・経済・文化に関する報道に力を入れている高級紙（NYタイムズ）を好んだとも推測できる。その傾向は、ゲジーネが渡米した4か月後に建設されたベルリンの壁をめぐる一連の報道に対して、彼女が抱いた印象から読み取ることが可能である。NYタイムズによるベルリンの壁に関する迅速な報道——「二流の文章、確実な引用、皮肉を交えた寸評、写真、とりあえずの概括、小分けにされたストーリー」（JT, 74）を追ううちに、ゲジーネはニューヨーク・タイムズに対して「疑念の持ちようもない」（Ebd.）と確信したのだという。ここで注目すべきは、NYタイムズへの信頼が確固たるものとなったきっかけが、遠く離れた故郷・ドイツに関する報道であったという点である。アメリカに来てはじめて「この土地の新聞が、ドイツの報道を世界中の報道と一緒に正しく位置づけている」（Ebd.）と感慨を覚えたゲジーネにとって、NYタイムズは東西両ドイツを離れた視点から見つめ直すためのツールといっても過言ではない。同紙はゲジーネの〈空想の故郷〉イギリスのみならず、〈帰れない故郷〉ドイツ、そして〈故郷となるべき場所〉アメリカをつなぐ媒体なのである。ゲジーネが故郷と錯覚するリバーサイド・ドライブにある住居もまた、NYタイムズに掲載されていた広告で見つけた物件だ。その意味においても、NYタイムズはゲジーネと故郷をつなぐ媒体であるといえよう。

3.2 新聞がもたらす疎外（Entfremdung）

ゲジーネが「タイムズおばさん」との〈対話〉を必要とする一因として、生の情報に触れる機会の少なさ、すなわち彼女の直接体験の乏しさが挙げられる²⁵。日々の時事ニュースに欠かさず目を通し、ニューヨークの街で起こっていることを十分に把握しているつもりでいるゲジーネは、新聞に書かれた内容をそのまま受け入れ、記事と現実を照らし合わせることはしない。たとえば市内の銀行が強盗に襲われたとしても、現場の写真が掲載されているNYタイムズを「腕の下に挟んでいる」（JT, 127）のなら、直接見に行く必要性も感じない。そのため、ごく近所で起こった事件について知っていながらも、実感が伴わないこともめずらしくない。

- ウェスト・エンド・アベニューの785、マリー、それはどこ？

- [...] うちのすぐ角よ、ミセス、マダム、ゲジーネ。
- それ [麻薬の密輸をめぐる騒動] が 99 番通りで起こったことを、あなた知っていたの？
- エスメラルダが教えてくれたの。ジェイソンから聞いて、ジェイソンが見たんだって。それを知るためにニューヨーク・タイムズは知らない、わたしが知っている女性とは違ってね、マダム、ミセス・クレスパール。(JT, 292)

新聞という媒体を通じてニューヨークにアクセスする母とは違い、娘のマリーは自分の足で街を探索する。地下鉄の運行路線が大幅に変更されれば、自分の目で確認するために駆け赴く (JT, 367-374)。ゲジーネがニューヨーク市内で起こる犯罪に関するニュースをチェックし、自分たち母娘の身を案じる一方で、マリーは自ら安全か危険か判断した上で行動する。上記のように、知りたいことがあれば身近にいる人間と情報交換を行う。こうして経験を積み重ねていった結果、マリーは新聞メディアの力を借りることなく、ニューヨークを自らの故郷として獲得するに至った。NY タイムズを通して新たな故郷を手に入れようとしているゲジーネは、ニューヨークの日常を間接的には体験しているものの、マリーが行っているような直接体験には結びつかない。デモに参加して反戦を訴えることをしなければ、自分の意見を NY タイムズに投書することもない。ゲジーネの受動性は、先に述べた〈死者〉たちとの対話でも問題となる。

おまえは満足なのかい？ここと、世界で起こっていることを新聞で知ることができれば。その場において、参加して、介入して、行動を起こす代わりに、それで十分なのかい？

わたしに残されたことを。なにが起こっているかを学ぶこと。せめてなにが起こっているかを知った上で生きること。

ゲジーネ、どうしておまえは昨日、ワシントンのデモに参加しなかったんだい？

それは教えない。(JT, 209 f.)

己の考えを実行に移すことにより、アメリカの罪を背負わされることを恐れるゲジーネは、責任が伴わない「客人」としてアメリカ、ニューヨークと距離を取りながらも、新聞メディアを介して間接的に故郷を獲得しようと試みる。しかし、どれほど新聞で学んだだけの知識を所持していても、実体験を補うことができない以上、アメリカもニューヨークも〈見知らぬ土地〉の域を出ない。ゲジーネと故郷をつなぐ役割を帯びているはずの新聞メディアは、間接体験にとどまっている限り、逆に故郷となるべき対象を遠

ざけ、疎外 (Entfremdung) をもたらしてしまう。その間接体験にしても、ベトナム戦争関係やニューヨーク内外で起こった犯罪事件など、彼女が注目している記事の大半が〈一般的な日常〉からかけ離れているため、実際のニューヨークの日常を追体験しているとは言い難い。そもそも新聞は、作中でNY タイムズが「世界の日記帳」と呼ばれているように、その日その日に起こった出来事を保存する歴史資料だ。日々の出来事は、新聞に掲載された瞬間から歴史となる。ラジオやテレビの生中継と異なり、決して〈今〉をリアルタイムに反映させることができない。過去を配信し続ける NY タイムズが〈現在のニューヨーク〉を映し出せるはずもなく、その意味でも新聞は生の情報の代替にはなり得ないのだ。ゲジーネが故郷と錯覚しているニューヨーク像は新聞メディアが作り上げたものに過ぎず、現実とは乖離してしまっている²⁶。「もちろん、マンハッタンのアッパー・ウエストサイドにあるわたしたちの故郷、それは思い込みに過ぎないのよ」——居住エリアであるリバーサイド・ドライブですら故郷としてじっくり来ないのは、そのためである。

3.3 新聞メディアと〈語られた故郷〉

ゲジーネの新たな故郷の獲得を阻害する一方で、新聞メディアは故郷の再生ないし生成に一役買ってもいる。マリーに家族の〈歴史〉(Geschichte) ——彼女の祖父母、すなわちゲジーネの両親の出会いから、自分たちがニューヨークにたどり着くまでの〈物語〉(Geschichte) を聞かせるにあたり、ゲジーネには自分自身の記憶を補完する必要があった。自分が直接知り得ないことや、時間の経過とともにあやふやになっていく思い出に手を加えて〈物語〉を進める母に、マリーは不満をこぼす。そのように話を聞かされてしまうと、自分にはなにが本当のことなのかさっぱりわからないと。

- わたし [ゲジーネ] はあなたに真実を約束したことはないわ。
- そうね。ただ、あなたの真実だけ。
- わたしがそれをどう捉えているか。
- ゲジーネ、覚えていることもあるんでしょう？
- フリードリヒ・ヤンゼン市長の、開脚メートル測定法。でも、わたしの記憶がどうしてこれを保管していたのかは、わからない。どうしてもっとほかの瞬間、もっとちゃんとしたやりとりではなかったの？
- 記憶猫でしょう、あなたが言うところの。
- ええ。なにものにも左右されない、買収できない、言うことを聞かない。それでも姿を現せば、心地よい仲間になる——たとえ手の届かない距離を保っていても。(JT, 670)

「記憶猫」。自分の意志ではどうにもならない記憶を、ゲジーネは自由奔放な猫に例える。すぐそばでつかず離れずの態度を取りながらも、いざ捕まえようとしようものなら、するりとその手をすり抜ける。自在にすがたかたちを変えたりもする。決して自分の思い通りにはならない「記憶猫」の存在を認めた上で、ゲジーネは「記憶猫」と対極の位置にある新聞に手を伸ばす。リッチモンド時代の両親の話をする際、ゲジーネは彼らがリッチモンドで暮らしていた1932年の「リッチモンド・アンド・トゥイッカナム・タイムズ」*Richmond and Twickenham Times* に目を通してている。

わたしには、わたしの語りがしばしば骸骨男のように感じられるの、肉づけができなくて、彼のためのマントを探したわ。イギリス習俗育成研究所。
[…]

この研究所はリッチモンド・アンド・トゥイッカナム・タイムズをマイクロフィルムで保有しているの、1873年の第1号から今日の分まで。(JT, 144)

両親がリッチモンドで暮らしていたころ、ゲジーネはまだこの世に生を受けておらず、その両親がこの世を去った今、彼らが実際にどのような環境に身を置いていたのかは知る由もない。1949年、16歳になったゲジーネは61歳の父に質問をする機会に恵まれ、「クレスパールの視点から」²⁷さまざまな情報を得た。しかし、それらの情報をもとに組み立てた〈物語〉はあくまで概要に過ぎず、ゲジーネ自身の視点を欠いているため、血肉を持たない「骸骨男」に等しい。実体験による「肉づけ」が今となっては不可能である以上、ならばせめてと彼女が探し求めたのは、むき出しの骨格を覆い隠すための「マント」——〈物語〉に深く関係する情報である。情報が多ければ多いほど、話は具体性を増す。報道によって読み手に間接体験の機会を与える新聞メディアは、ゲジーネの語りにリアリティを持たせるためのツールとしての役割を課される。「わたしはあなた[マリー]に、かつてどうだったかを説明したかっただけよ。どんなふうでありえたかを」(JT, 560)——血肉の代わりに「マント」を手に入れた「骸骨男」は、かつての姿には戻れない。ゲジーネの語り描き出す過去や故郷も、彼女がかつて体験したものと同一ではなく、新たに形成されたものである。

NYタイムズもまた、ゲジーネの「骸骨男」に「マント」を貸し出してくれる存在だ。同紙がゲジーネの語りと記憶を補完するために提供するもののひとつとして、写真が挙げられる。なぜ自分が直接体験していない出来事についてすらすら話せるのかと疑問を呈する娘に、ゲジーネは情報源として本や映画や手紙を挙げ、更にNYタイムズに掲載されている写真を引き合いに出す。

- わたしがかつて見ることができなかったもの。学ばなかったもの、

これから取り戻さなくてはいけないもの。ニューヨーク・タイムズに載っている、今日のサイゴンの写真——。[…]
[…] わたしは人が殺されるところを、見たことがないの。2枚目の写真は、捕虜が死ぬ瞬間を映しているわ。(JT, 672 f.)

ここでも間接体験の機会をもたらすNYタイムズだが、失われたニューヨークの日常の埋め合わせを目的としている前述のケースとは異なり、疎外を引き起こさない。NYタイムズは、「記憶猫」の存在に手を焼くゲジネの回想をその都度補完し、記憶を再構築するための材料となる。記憶の再構築を促すのは、写真だけではない。NYタイムズの記事内容や特定の単語およびフレーズ、日付や記念日など、同紙で言及されているすべてがゲジネの記憶を呼び起こすスイッチとなり得る²⁸。記憶とともに呼び起こされる故郷の像は、ゲジネが実際に体感した故郷と同一のものではない。新たな記憶とともに、新たな故郷が紡がれる——ゲジネの語りを支えるNYタイムズは、故郷を再構築する役割をも担っているのである。

4. まとめ

ここまで、ゲジネが新聞を通して〈故郷〉(Heimat)の獲得を試みていること、NYタイムズがゲジネと彼女の現在と過去、現実と虚構の故郷をつなぐ媒体であること、そして新聞を通して得られる間接体験が一方では〈疎外〉(Entfremdung)をもたらし、もう一方では故郷を新たに構築する役目を果たしていることが明らかになった。「読むことによって、なんとしてでも故郷を手に入れようとしていた異邦人」——新天地にやってきたゲジネが一心不乱に新聞に目を通すのは、ひとつには歴史資料たる新聞をもって〈持たざる記憶〉を埋めるためであり、断片的に残っている記憶や印象を補い、失われた故郷・イェーリヒョー／メクレンブルクの〈物語〉(Geschichte)を語る過程で再構築するためでもある。

以上のことからわかるように、故郷は記憶と切っても切れない関係にある。過去となり記憶に刻まれてはじめて、故郷という空間が成立し得るのだ。デュッセルドルフで生まれ、4歳までの時を過ごしていながらも、渡米後に当時の記憶を一切忘れてしまったマリーは、ドイツを故郷として認識することができない。記憶が失われてしまったその瞬間に、故郷もまた消滅してしまうのである。特定の場所にまつわる記憶を持たないというハンディキャップを乗り越えるため、絶えず情報収集を続けるゲジネは、記憶を知識に置き換えることで故郷の獲得を試みる。しかし直接的な体験を交えることなく、新聞メディアなどの記録を頼りにしているだけでは、いつまで経っても彼女の望む故郷にたどり着くことは叶わない。記憶が介在しない故郷は存在しない。たとえ記憶を保持していても、それがいつ失われるかは誰にもわからない。おぼろげな記憶を知識や情報

で固め、故郷の像を再構築することに成功したとしても、背後に潜む「記憶猫」が記憶に働きかける機会を常にうかがっている以上、故郷そのものが常に危険にさらされているといえるだろう。

「写真を撮るのは、わたしの代からはじまったの。一族の中で忘却を恐れたのは、わたしが最初だった」(JT, 937) ——人の記憶とは異なり、記録は完全なかたちで残る。それでも記録は、故郷を無条件に与えてはくれない。「記憶猫」に翻弄される自分の記憶も、故郷を保障してはくれない。ゲジーネが置かれている状況は、通常は自明であるとされ、無意識のうちに享受されている故郷の存在が、実は危ういものであるということを物語っている。

註

本稿は、2012年6月28日に第1回東京大学・駒場ドイツ語研究会（東京大学駒場キャンパス）で行った研究発表をもとに執筆、再構成したものである。本稿におけるヨンゾンンの著作、およびその他注記のない引用文はすべて拙訳であり、引用箇所におけるイタリック体は原文のままである。

¹原典は Johnson, Uwe: *Jahrestage. Aus dem Leben von Gesine Cresspahl*. Frankfurt am Main (Suhrkamp), Bde 1-4. 1970 [Bd.1], 1971 [Bd.2], 1973 [Bd.3], 1983 [Bd.4]を使用した。引用は S. 518 より。以下、*Jahrestage* は JT と省略し、巻数と頁を本文中に記す。Bd. 4 成立に至るまでの 10 年に及ぶタイムラグは、ヨンゾンンがスランプ状態に陥っていたためであるとされている。主な原因として婚姻関係の破綻が挙げられ、ヨンゾンン自身は 1980 年に刊行された『付帯状況』*Begleitumstände*（フランクフルト詩学講義録）の中で妻が長年チェコスロバキア秘密警察と通じていたことが破綻の理由であると述べているが、妻は秘密警察との関係を一切否定している。真相がすべて明らかになっていないこともあり、成立経緯についてはここではこれ以上は触れない。

² Greverus, Ina-Maria: *Auf der Suche nach Heimat*, S. 18.

³ 正確には、『記念の日々』は 366 日+1 日の計 367 日分の章から構成されている。冒頭に日付が記入されていない章が置かれており、この章が 1967 年 8 月 21 日の前日、すなわち 1967 年 8 月 20 日であることが、挿入されている NY タイムズの記事 (JT, 9) および文中 (JT, 9 f.) から読み取れる。また、1968 年はうるう年である。

⁴ Mecklenburg, Norbert: *Die Erzählkunst Uwe Johnsons*, S. 337.

⁵ Lennox, Sara: *Die New York Times in Johnsons Jahrestagen*, S. 107.

⁶ The Encyclopedia of New York City, pp. 846.

⁷ JT, 612 f. も参照。この反戦発言の影響で、アーサ・キットは米社会から排斥されるに至った。併せて Johnsons *Jahrestage* – Der Kommentar 「19. Januar, 1968」「20. Januar, 1968」の項も参照。

- ⁸ Plocher, Isabel: „Wenigstens mit Kenntnis zu leben.“, S. 106 参照。
- ⁹ 作中に組み込まれている NY タイムズ紙への言及と、実際の NY タイムズ紙面との対比については Johnsons *Jahrestage* – Der Kommentar (Online-Version) を参照。
- ¹⁰ Mecklenburg, Norbert: Ebd., S. 265.
- ¹¹ Plocher, Isabel: Ebd., S. 100 参照。
- ¹² 従って、ゲジエネの読みが“uncritical acceptance”だとする S. Lennox の主張 (Lennox, Sara: History in Uwe Johnson’s *Jahrestage*, pp. 36) は誤りである。
- ¹³ Johnsons *Jahrestage* – Der Kommentar 「26. Dezember, 1967」の項を参照。
- ¹⁴ JT, 38-40, 74-78, 608-612, 1507-1509 (NY タイムズのカリカチュアの紹介) 参照。
- ¹⁵ Plocher, Isabel: Ebd., S. 101 参照。
- ¹⁶ Johnsons *Jahrestage* – Der Kommentar 「18. Januar, 1968」の項を参照。
- ¹⁷ Plocher, Isabel: Ebd. 参照。(Storz-Sahl, Sigrun: Erinnerung und Erfahrung. Geschichtsphilosophie und ästhetische Erfahrung in Uwe Johnsons *Jahrestagen*, S. 121 も参照)
- ¹⁸ Storz-Sahl, Sigrun: Ebd., S. 88 参照。
- ¹⁹ Fischer-Kania, Sabine: Geschichte entworfen durch Erzählen, S. 100 参照。
- ²⁰ Johnsons *Jahrestage* – Der Kommentar 「18. Januar, 1968」の項を参照。
- ²¹ Gumbrecht, Hans Ulrich: Nach 1945, S. 220 参照。
- ²² Hamann, Christof: Doppeltes Scheitern, S. 291 f. 参照。
- ²³ Plocher, Isabel: Ebd., S. 66 参照。
- ²⁴ しかし「[ニューヨーク・デイリー・] ニュースのアメリカ英語も学ばなかったなら、ブロードウェイで途方にくれていたと思うわ」(JT, 516) と発言していることから、ニューヨーク・デイリー・ニュースにも何度か目を通していたものと思われる。
- ²⁵ Fischer-Kania, Sabine: Ebd., S. 99 参照。
- ²⁶ Kaiser, Alfons: Für die Geschichte, S. 98 ff. 参照。
- ²⁷ 2 巻の巻末に収録されている「付録」参照 (JT, Anhang I-XVIII)。この付録は本編とは独立している。「クレスパールの視点から」はこの付録の表題である。
- ²⁸ NY タイムズとゲジエネの記憶の「連結」に関しては、Kaiser, Alfons: Ebd., S. 113-119 を参照。

参考文献

Elfenbein, W. Stefan: The New York Times. Macht und Mythos eines Mediums. Frankfurt am Main 1996.

Fischer-Kania, Sabine: Geschichte entworfen durch Erzählen. Uwe Johnsons *Jahrestage*. Zeit und Text 9, Münster 1996.

Gerbhard, Gunther/Geisler, Oliver/Schröter, Steffen: Heimatdenken: Konjunkturen und Konturen. Statt einer Einleitung. In: Gerbhard, Gunther/Geisler, Oliver/Schröter, Steffen (Hg.): Heimat. Konturen und Konjunkturen eines umstrittenen Konzepts. Bielefeld 2007, S. 9-56.

- Greverus, Ina-Maria: Auf der Suche nach Heimat. München 1979.
- Gumbrecht, Hans Ulrich: Nach 1945. Latenz als Ursprung der Gegenwart. Berlin 2012.
- Hamann, Christof: Doppelt Scheitern. New York und die Erinnerung in *Jahrestage*. In: Johnson-Jahrbuch, Band 9/2002. Göttingen 2002, S. 275-295.
- Horzen, Deborah L.: Fitting the News to the Novel. Uwe Johnson's Use of *The New York Times* in *Jahrestage*. In: Fries, Ulrich/Helbig, Holger (Hg.): Johnson-Jahrbuch, Band 6/1999. Göttingen 1999, S. 183-207.
- Kaiser, Alfons: Für die Geschichte. Medien in Uwe Johnsons Romanen. St. Ingbert, 1995.
- Laak, Lothar van: Medien und Medialität des Epischen in Literatur und Film des 20. Jahrhunderts. Bertolt Brecht – Uwe Johnson – Lars von Trier. München 2009.
- Lennox, Sara: Die *New York Times* in Johnsons *Jahrestagen*. In: Paulsen, Wolfgang (Hg.): Die USA und Deutschland. Wechselseitige Spiegelungen in der Literatur der Gegenwart. Bern 1976, S. 103-109.
- History in Uwe Johnson's *Jahrestage*. In: Germanic Review 64, Columbia 1989 [1], pp. 31-41.
- Mecklenburg, Norbert: Die Erzählkunst Uwe Johnsons. Frankfurt am Main 1997.
- Michaelis, Rolf (Hg.): Kleines Adreßbuch für Jerichow und New York. Ein Register zu Uwe Johnsons Roman. Frankfurt am Main 1983. – Überarbeitete, digitale Ausgabe von Lohmeier, Anke-Marie (Hg.): <http://literaturlexikon.uni-saarland.de/index.php?id=484> (2013年6月27日閲覧)
- Plocher, Isabel: „Wenigstens mit Kenntnis zu leben.“ Der Mediendiskurs in Uwe Johnsons *Jahrestage* am Beispiel der *New York Times*. Würzburg 2004.
- Schmitz, Peter Martin: Studien zum Heimatkonzept in Uwe Johnsons Roman *Jahrestage*. *Aus dem Leben der Gesine Cresspahl*. [原文ママ] Bologna 2004.
- Spahn, Martin: Die Presse als Quelle der neuesten Geschichte und ihre gegenwärtige Benutzermöglichkeiten. In: Internationale Wochenschrift für Wissenschaft Kunst und Technik. Berlin 1908 (Band II), S. 1163-1170, 1201-1212.
- Storz-Sahl, Sigrun: Erinnerung und Erfahrung. Geschichtsphilosophie und ästhetische Erfahrung in Uwe Johnsons *Jahrestagen*. Frankfurt am Main u. a. 1988.

辞典・データベース

- Helbig, Holger/Kokol, Klaus/Müller, Irmgard/Spaeth, Dietrich (†)/Fries, Ulrich (Hg.): Johnsons *Jahrestage* - Der Kommentar (Online-Version).
<https://www.phf.uni-rostock.de/institut/igerman/johnson/johnkomm/default.html> (2013年6月27日閲覧)
- Mooney, Richard E.: "New York Times". In: Eisenstadt, Peter/Moos, Laura-Eve (ed.): The Encyclopedia of New York State. New York 2005, pp. 1103-1104.
- Salisbury, Harrison: "New York Times". In: Jackson, Kenneth T. (ed.): The Encyclopedia of New York City. New Haven u. a. 1995, pp. 846-848.

